

日本人学生の英語ライティングを改善するための言語技術教育

教育センター外国語教育推進部 特任准教授 原 隆幸

キーワード：大学共通教育・鹿児島大学の英語教育・日本人学生・英語ライティング・言語技術教育

1. はじめに

近年、大学生の英語力は大学や学部にもよるがあまり高くなく、それは日本語力についても言える。鹿児島大学に目を向けると、赴任して2年間教えた経験からも同様のことが感じられる。例えば、1年生前期に設定されている英語コアC（英作文）の授業でパラグラフ・ライティングを指導する際に、ある程度は英語で書けるものの、結論が明確でないため全体としてのまとまりが悪くなる傾向がある。また、英語の授業で取り扱った内容を取り上げ、それに関するレポートを提出させる際に、どのような内容をそれぞれ何文字程度書くのかを細かに指示しなければ、こちらの要求するレポートが提出されないのが現状である。これらに共通しているのは、学生たちは、「言語技術」に関する訓練を積んできていないことが影響している。つまり、小学校から高校で受けてきた国語（日本語）教育の影響を受けていると言える。

本稿では、英語のライティングを改善するための方法について、言語技術の観点から考えていく。そのためにまず、現行の鹿児島大学共通教育におけるカリキュラムを概観し、その上で、英語教育を見ていく。次に英語教育の中でも筆者の担当する「英語コアC（英作文）」の授業内容の1つを提示し、学生の英語のライティングの問題点を指摘する。その問題点の解決法の1つとして、言語技術に関して考察し、英語のライティングを改善するための方法を提案する。

2. 鹿児島大学の英語教育

まず、ここでは鹿児島大学の共通教育課程で設定されている英語科目を概観する。現在、鹿児島大学の「共通教育課程」における英語科目は、「共通教育科目・人間力養成プログラム」に属し、その中の中分類で「e コミュニケーション力」に含まれる。「e コミュニケーション力」は、「情報・通信を学ぶ」、「外国語を学ぶ」、「日本語・日本事情を学ぶ」から構成されている。また、この「共通教育科目・人間力養成プログラム」の選択必修科目は「〔1〕身体力に関する科目」と「〔2〕コミュニケーション力に関する科目」から成り、後者はさらに、「〈1〉情報・通信を学ぶ科目群」と「〈2〉外国語を学ぶ科目群」に分かれている。

「〈2〉外国語を学ぶ科目群」の内容は、『平成26年度 入学生 共通教育履修案内』（P. 20）によると次のようにある。

多様な世界観の共存を認めあう国際環境が求められている現在、諸文化間の人的交流や情報交換がますます必要となっています。こうした時代の要請の中で、外国語教育は共通教育における重要な科目の一つとなっています。外国語教育の目標は、諸言語によって表現された内容を正確に理解し、その言語による表現能力を高め、諸文化と価値体系の多様性に対する理解を深め、自己の文化的基盤を自覚し、国際理解と交流の能力を養うことにあります。…

これらの目標を達成するために、「外国語コア科目」と「外国語オープン科目」が開設されている。同『共通教育履修案内』（P. 20）によるとこの2つは次のように説明されている。「外国語コア科目」は「外国語の基礎能力を修得し、基本的な運用能力を養うことを目的とする授業」である。一方、「外国語オープン科目」は「コア科目で修得した能力を応用・発展させることを目的とし、異文化理解、日常会話、

時事外国語、専門外国語等を授業内容とする」とある。

外国語を英語に絞って見ていくと、コアの授業は一般的な英語の運用力を「読む」、「書く」、「聴く」、「話す」の四技能にわたって養成することを目標にしており、基本的に「英語コアC（英作文）」、「英語コアU（総合英語）」、「英語コアO（オーラル・コミュニケーション）」、「英語コアR（講読）」から構成される。オープンの授業は、特定分野または主題に焦点を定めた、general English（一般英語）の発展・応用としての目的別英語の授業である。

さらに「コアC（英作文）」に焦点を当てると、レベル別に、上級、中級、初級（と基礎）に分かれており、学習目標の中身はそれぞれ異なる。例えば、上級の目標の1つは「複数のパラグラフでパッセージを構成する力を身につける」、中級の目標の1つは「ワンパラグラフ（80-100語程度）の構成のしっかりした英文を書く力を身につける」、初級の目標の1つは「ワンパラグラフ（50-70語程度）簡単で短い英文を書く力を身につける」とある。このようにエッセー・ライティング、またはパラグラフ・ライティングを身につけることが求められている。そのため、推奨テキストのリストにもそのような知識を身につけるものが挙げられている。

3. 英語コアC（英作文）の授業と問題点

筆者は前期に7クラス英語を教える中で、「英語コアC（英作文）」を5クラス教えている。レベル別に見ていくと、上級1クラス、中級3クラス、初級（基礎）1クラスである。ここでは、中級3クラスのうち、2014年度の2クラスで行った授業を振り返る。

今回推奨テキストのリストから選んだテキストの1つは3つの部分、①「準備」、②「パラグラフ・ライティングを理解する」、③「パラグラフを書くための様々な方法」から構成されている。まず①「準備」では、短めのパラグラフを書き、同時にパンクチュエーション（句読法）、タイトルの書き方、パラグラフの考え、パラグラフの体裁なども学んでいく。次の②「パラグラフ・ライティングを理解する」では、「トピックセンテンス（Topic Sentence）」、「ボディ（Body）」、「メジャーサポートセンテンス（Major Support Sentence）」、「マイナーサポートセンテンス（Minor Support Sentence）」、「コンクルージョン（Conclusion）」について学んでいく。テキストによる各定義は次の通りである。

- | | |
|---------------|---|
| トピックセンテンス | : 書き手の言いたいことを集約的に表現する。パラグラフのテーマを表す。 |
| ボディ | : トピックセンテンスの内容を説明・発展させる（メジャーサポートセンテンスとマイナーサポートセンテンスで構成される）。 |
| メジャーサポートセンテンス | : トピックセンテンスの内容を直接的に発展させる。 |
| マイナーサポートセンテンス | : メジャーサポートセンテンスの内容を発展させ、間接的にトピックセンテンスを発展させる。 |
| コンクルージョン | : まとめとして、トピックセンテンスの内容を違う表現で繰り返す。 |

その後、③「パラグラフを書くための様々な方法」として、描写パラグラフ（Descriptive Paragraph）、例示パラグラフ（Illustration Paragraph）、物語パラグラフ（Narrative Paragraph）、定義パラグラフ（Definition Paragraph）、分類パラグラフ（Classification Paragraph）、因果関係パラグラフ（Cause and Effect Paragraph）と学んでいく。授業では前半では各ユニットで学ぶポイントを、問題演習を通して学び、後半では実際に100-120語程度のパラグラフを毎回書き提出する。学生が提出したものは毎回教員が添削し、次の週に返却するといったスタイルで進めてきた。後半のやり方は次に示す通りである。テキストには毎回書くためのテーマが書かれており、それに関連したUseful Expressionsが1ページあるので学生は、①大きなテーマから自分の書けそうなテーマをいくつか挙げる。②そのテーマの中から話を膨らませることができそうなものを1つ選び、書きたい内容を書き出し

ていく。③②で書き出したことをベースにパラグラフ・ライティングの下書きを行う。④書いた下書きを他の学生と交換し、フィードバックをもらい清書をする。

そこで見えてきた問題が2つある。1つは、問題演習で出てきたサンプル・パラグラフやUseful Expressionsでの表現以外は、自分で語句を選び文を作成するが、電子辞書で部分訳しか見ていない、または、スマートフォンなどでウェブ上の翻訳機能を使い訳した英単語や表現をそのまま書くため、添削する際に通じない英文を書く学生が多いことである。もう1つはかろうじてタイトル、トピックセンテンス、ボディーと上手く書いていても、肝心のコンクルージョンがあいまいで何が言いたいかわからない、または、トピックセンテンスとボディーでの内容を上手く別の言葉でパラフレーズ（言い換え）できないことである。前者は、なるべく紙の辞書を使い用例を確認する、参考文献に挙げた文法書を使う、電子辞書の内容を吟味する、言いたいことを一度簡単な日本語に言い換えてから英訳するなどの指導をするとともに、授業の後半の週からは、日本語訳を書かせることにより、ある程度解決できた。しかし後者は、全体の3分の1程度は最後まで理解できていなかった。

4. 問題点の解決法として「言語技術」の導入

上記、後者の「コンクルージョンで何が言いたいかわからない、または、トピックセンテンスとボディーでの内容を上手く別の言葉でパラフレーズ（言い換え）できないこと」は英語ができないからではなく、日本語訳を見ても明らかであった点である。つまり、一部の学生たちは日本語の文章を書く際にも結論をはっきりと書かない傾向にあり、それが英語のパラグラフ・ライティングにも転移していると推測される。現在、鹿児島大学の共通教育の科目の中には、「セミナー・学問のススメ」（テーマを見つけ、資料収集をし、分析・整理した後、ディスカッションし、最終的にプレゼンテーションをする授業）や「レポート作成の基礎」（レポートの書き方を学ぶ授業）があるが、それではまだ問題点を解決できないと思われる。そのための解決法の1つとして、「言語技術」の導入を考えてみたい。「言語技術」（Language arts）とは、三森（2013: 3）によると「簡単に言えば言葉を有効に使いこなすためのスキルです。同時にまた、世界の多くの国々で母語教育として指導されている世界基準の言語教育でもあります」、とのことである。具体的には、次のようなものを含んでいる。

物語る・説明する・報告する・記録する・論証する・アピールする
意見を書く・小論文を記述する・レポートを書く・論文をまとめる
対話する・議論する・討論する・説得する・交渉する
質問する・インタビューする
分析する・読解する
論理的に施行する・多角的に考察する・批判的に検討する

三森（2013: 6-7）はまた、「言語技術とは、思考と表現の方法論を具体的なスキルとして指導する総合的な体系であり、その目標は、人間形成にあります。どのような人間を形成するのかといえば、概ね次のような人間です」と述べ、次の4つを挙げている。

- ①自立してクリティカル・シンキングができる（自分の力で物事を論理的、分析的、多角的に検討し、適切な判断を下す能力を持つ）
- ②自立して問題解決をする能力を持つ
- ③考察したことを口頭・記述で自在に表現できる
- ④自国の文化に誇りを持つ教養ある国民を育てる（「教養」には「人間味豊かな人間」の意が含まれる）

これらは本来、小学校から高校までの学校教育の中で発達段階に応じて、情報の取り込み（読むこと・観ること・聞くこと）、思考（批判的・論理的・分析的・多角的・創造的思考など）、表現（話すこと・書くこと）などを体系的、そして具体的に学んでいくのであるが、大学1年生の段階で基礎を身につけ、その後2年生から4年生の授業やレポート作成を通して磨いてもいいであろう。これ以外にも『Good Writing [グッドライティング]へのパスポート：読み手と攻勢を意識した日本語ライティング』（田中・阿部: 2014）もあり、これは文章執筆演習を想定してのテキストである。

また、コンクルージョンの「まとめとして、トピックセンテンスの内容を違う表現で繰り返す」ことができないのであれば、それに特化した授業を行う、または「英語コアC（英作文）」に一部この日本語で言い換える内容を盛り込むことも考えられる。例えば、蒲田・仁科（2014）は外国人留学生向けのアカデミック・ライティング能力の向上を目指すテキストであるが、「読んだことを書く」、「聴いたことを書く」、「話したことを書く」、「書いた内容を別の表現内容で書きなおす」といったときに用いるパラフレーズを取り上げており、「単語を言い換える（狭い範囲のパレフレーズ）」、「意味を読み取って言い換える（広い範囲のパラフレーズ）」、「目的に応じた形式で書く」、の3段階で学べる構成となっている。この内容は日本人学生にも有用である。例えば、最初の「単語を言い換える（狭い範囲のパレフレーズ）」では、次のような文が挙げられている。

(1) リチウム電池は、ノートパソコンとか携帯電話とか、いろんなものに使われています。電機自動車への本格的な導入が始まり、これからはもっと幅広い活用が期待されます。

(2) リチウム電池は、ノートパソコンや携帯電話など、さまざまなものに使われている。電機自動車への本格的な導入が始まり、これからはさらに幅広い活用が期待される。

(1)は口語的表現、つまり話し言葉であり、レポートや論文ではふさわしくない。レポートや論文、つまり書き言葉では、(2)のように書くといった内容から始まる。次の「意味を読み取って言い換える（広い範囲のパラフレーズ）」の「含意／解釈」の課では、含意の定義、「文字どおりの意味ではなく、その表現に含まれる意味のことを『含意』という。聴いた内容や読んだ内容を文章にまとめる場合には、含意を表すことが重要である。含意を読み取るには、前後の文や文章全体にも注意する」、を具体的に問題演習しながら学ぶ。例として(3)が挙げられており、(4)には言い換えが示されている。

(3) 大学の掲示物の字が小さくて読みにくい。必要な情報が読み取れず、情報を見逃すことがある。

(4) 大学の掲示物の字を読みやすく大きくしたほうがよい。

こういったポイントを日本語の文章表現でしっかりと学ぶことで、一般的な言語表現の基礎ができる。その結果、英語の文章表現にもこの知識が転移し、短時間で英語の文章表現を改善することが可能となると推測される。最後の「目的に応じた形式で書く」では、実践問題として「インタビューの内容をレポートに書く」ことなどを学んでいく。

5. おわりに

ここ2年の鹿児島大学の教授を振り返ってみると、学生の英語力は大学や学部にもよるがあまり高くなく、それは日本語力についても同様のことが言える。英語コアC（英作文）の授業を思い返してみると、ある程度は英語でパラグラフ・ライティングできるものの、結論が明確でないため全体としてのまとまりのないライティングになる。また、レポートを提出させる際にも、内容、文字数、書き方など細かく指示しないとこちらの要求するレポートが提出されない。これらは学生たちが「言語技術」をきちんと学んできていないことが原因である。つまり、大学入学前までに学生たちが受けてきた国語（日本語）

Ⅲ 研究論文

教育の影響とも言い換えられる。

現行の鹿児島大学共通教育におけるカリキュラムには、プレゼンテーションを学んだり、レポートを学んだりするものは存在するが、それに加えて「言語技術」教育（様々な内容のパラフレイズを含む）の導入を解決策として提案したい。言語技術教育を通して日本語の文章表現能力を鍛えることは、英語のライティング力を向上させるために効果的である。英語だけではなく、初修語（ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語）などの学習にも応用できる。また、言語技術教育で培った技能を使用することで、効果的にレポートを書いたりプレゼンテーションをしたりすることができる。さらに、この言語技術で身につけた内容は、社会人になっても役に立つものである。

参考文献

- 江利川春雄、齊藤兆史、鳥飼玖美子、大津由紀雄（2014）「母語と切り離された外国語教育は失敗する：日本の学校教育における英語教育の目的を探る」、『学校英語教育は何のため？』東京：ひつじ書房、57-84
- 遠藤功樹（2011）『A Passage to Paragraph Writing: 図解で学ぶパラグラフライティング』東京：センゲージャーニング株式会社
- 浜田麻里、平尾得子、由井紀久子（1997）『大学生と留学生のための論文ワークブック』東京：くろしお出版
- 蒲田美千子、仁科浩美（2014）『アカデミック・ライティングのためのパラフレイズ演習』東京：スリーエーネットワーク
- 三森ゆりか（2013）『大学生・社会人のための言語技術トレーニング』東京：大修館書店
- 田中真理、阿部新（2014）『Good Writing [グッドライティング] へのパスポート：読み手と攻勢を意識した日本語ライティング』東京：くろしお出版
- 卯城祐司、アレン玉井光江、バトラー後藤裕子（2013）『リテラシーを育てる英語教育の創造』東京：学文社